

自然言語形而上学と存在論的コミットメントの概念

高取正大 (Masahiro Takatori)

慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程

自然言語の意味論の探究が、「存在論的」あるいは「形而上学的」と呼びうる領域の議論と深い関わりをもつ、というアイデアは、現代の言語哲学および形而上学において、広範に認知されたものである。よく知られたように、(可能)世界、時点、出来事、状態、性質、個体… etc. といった様々な種類の対象が、自然言語の話法や表現に対して意味論的分析を与える際に、広く用いられる。そして、こういった対象のカテゴリーを認めることは、実質的な仕方で、存在論的もしくは形而上学的含意を伴うように思える。以上のような理解に基づき、自然言語とその意味論的考察がどんな存在論的／形而上学的含意をもつかということの探究は、こんにちの言語哲学において、一つの研究プログラムを形成している。このプログラムは、一般に、「自然言語形而上学 (natural language metaphysics)」の名前で有名である (cf. Bach (1986), 飯田 (2002))。

「自然言語形而上学」という名前は、研究上のアジェンダとしてこんにち高い知名度をもち、具体的な意味論構築の場面において言及されることも多い。しかしそのアジェンダとしての知名度に比べて、自然言語形而上学そのものがいかなる探究プログラムであるのかについての、方法論的なレベルでの考察は、(発表者の知る限り) 少ないように思われる。そしてその結果として、このプログラムの正確な内実についても、不明確な部分が多く残されていると考えられる。例えば、ごく基本的な点について、以下のような指摘が可能である。すなわち、Bach による、よく知られた定式化に従えば、自然言語形而上学の問いは、次の二つに分けられるとされる (Bach (1986), p. 573)。

1. ひとが語るところによれば、何があるのか？
2. 自然言語がもつと考えられる意味の構造を明示するためには、どんな種類のものがあり、それらの間にどんな関係が成り立つことが必要なのか？

しかしながらこの定式化は、(少なくともこのままでは) 実は問題含みなものだと言える。というのも、これら二つの問いの内容は、本当のところ大きく異なっており、これらに取り組むことがどのようにして、一つの統一的な探究目標に寄与するのかが不明だからである。1と2の違いは、いわゆる“存在論的コミットメント”の概念に訴えることで説明できる。存在論的コミットメントの概念は、一般的には、ある言語上の文や理論に対して帰属されるものであり、〈それらの文／理論が真であるためには、世界に何が存在せねばならないか〉を述べるものである。この概念を適用すると、上述の1は、意味論が与えられる自然言語(対象言語)上の主張(文)について、それがいかなる存在論的コミットメントをもつかに関する問いだと捉えられる。他方、2は、(いくら曖昧なところはあるが)むしろ意味論(メタ言語上の主張)そのものがどんな存在論的コミットメントをもつか、ということへの問いであると解釈される。そして、対象言語上の文(主張)がもつ存在論的コミットメントと、そのメタレベルの意味論がもつ存在論的コミットメント

との間には、特殊なケースを除いて、実質的な違いが生じることが、知られている (cf. Rayo (2007), Krämer (2014))。このような解釈が正しいとすれば、1と2の答えを探究することは、単に別の主題 (異なる言語上の異なる文/理論) について、別の解答 (異なる存在論的コミットメント) を与えようとする、別個の取り組みだと理解されるだろう。しかしそうだとすると、自然言語形而上学が全体として、どのような探究プログラムであるのか (全体として何を問うのか) に関しては、統一的な定式化が与えられないままである。以上のような指摘は、次のことを示していると思われる。つまり、自然言語形而上学のプログラムは、その基本的定式化の段階において、まだよく整理されておらず、不明瞭な点を含んでいるのである。

ここまで述べたような状況を踏まえ、本発表では、自然言語形而上学というプログラムの、より正確な内実を明らかにし、その性格を特定することを目標とする。具体的には、この目標に貢献するため、以下のような内容を扱う。すなわち、(A) 上述の問い 1 と 2 の違いをめぐる論点については、自然言語形而上学は基本的に 1 を主題とする問題領域と考えるのがもっともらしい、と発表者は主張する。この主張を支持するための議論は、現実にこのプログラムに従事している哲学者が、もっぱら何を探究の目標としているか、ということに訴えるものである。またその過程で、1 と 2 の関係について、独自の見解を提出している (と見なせる)、飯田 (2002), ch.6 の議論を、批判的に検討する。次いで、(A) での議論を前提したうえで、自然言語形而上学に関して頻繁に主張される、次の論点について、その実質を検討したい。すなわち、(B) 自然言語形而上学については、「真性の形而上学的探究とは区別された問題領域である」ということが一般に言われる (cf. Moltmann (forthcoming))。この (B) に対して、発表者は、次のような仕方で批判を加える。すなわち、自然言語形而上学が有意義な探究領域であると認めるためには、実質的な (メタ) 形而上学的前提を受け入れている必要がある。従って、自然言語形而上学を、真性の形而上学的探究から分離しようとする試みは (せいぜい不十分にしか) 成功しない、というものである。

参考文献

- Bach, E. (1986), “Natural language metaphysics”, in Marcus, R. B., Dorn, G. J. W. & Weingartner, P. (eds.) (1986), *Logic, Methodology and Philosophy of Science IV*, pp. 573—595.
- 飯田隆. (2002), 『言語哲学大全 IV』. 勁草書房.
- Krämer, S. (2014), *On What There Is For Things To Be: Ontological Commitment and Second-Order Quantification*. Vittorio Klostermann.
- Moltmann, F. (forthcoming), “Natural Language Ontology”, in *Oxford Encyclopedia of Linguistics*.
- Rayo, A. (2007), “Ontological Commitment”, *Philosophy Compass* 2: 428—444.